【238】

| | |
|---|---|
| 氏名（本籍） | 福本佳代（奈良県） |
| 学位の種類 | 博　士（デザイン学） |
| 学位記番号 | 博甲第2,195号 |
| 学位授与年月日 | 平成11年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 学位論文題目 | **地方小都市の歴史的市街地における空間変容と計画課題に関する研究** |
| 主査 | 筑波大学教授　工学博士　冨江伸治 |
| 副査 | 筑波大学教授　工学博士　安藤邦廣 |
| 副査 | 筑波大学助教授　農学博士　鈴木雅和 |
| 副査 | 神戸芸術工科大学教授　工学博士　土肥博至 |

## 論文の内容の要旨

平成10年に「地方都市中心市街地活性化法」が成立し，都市計画・都市行政の分野において，地方都市の再生に関して多くの関心が向けられるようになった。そうした動きの背景には，もはや無視することのできないほど進行した多くの都市の中心地区の衰退という現象がある。しかし，大都市に比較して，地方都市，とくに中小都市の市街地を対象とした研究の蓄積はきわめて少なく，その整備方向や整備手法は暗中模索の状態にある。本論文は，こうした地域の問題に注目して着実に研究を進めてきた著者が，一連の成果をまとめたものであり，地方都市を取り巻く状況に対して時宜を得た研究といえるものである。

研究は，急速な衰退・崩壊が憂慮される地方小都市の歴史的市街地に焦点を絞り，その現状をこの30年間の市街地空間の変化という側面から捉えたものである。近世にその成立基盤をもつこれら中心市街地には，さまざまな歴史的，文化的ストックが存在し，ただ荒廃にまかせるのは問題であるという視点に立って，こうした市街地の計画課題を抽出し，整備の方向性を考察したものである。

論文は，本論7章および補論からなり，最後に資料がついている。

第1章では，研究の背景を述べた後，研究の目的として，1）地方小都市をその特性に基づいて類型化し，類型別に歴史的市街地の空間変容の実態を調べ，そのメカニズムを解明すること，2）市街地の現状と環境改善の動向を調べ，上記のメカニズムとの関係を整理し，再整理に向けての計画課題を明らかにし，活用，再生の方向を示すこと，の2点を挙げている。また，多くの先行研究のレビューを行って，本研究の位置付けを明確にしている。

第2章においては，地方小都市および歴史的市街地をいくつかの指標によって定義したうえで，地方小都市として全国自治体の約3分の1にあたる1120を抽出し，その分布特性を考察している。ついで，その中の262都市が歴史的市街地をその中心にもつ，本研究の直接対象となる歴史的小都市であることを示している。

第3章は，歴史的市街地が直面している問題を大まかに把握するために行った3つの段階的な調査とその結果についてまとめた章である。まず，ランダムに選定した101都市の歴史的市街地について現地観察調査を実施し，その全体的な衰退の現状を把握し，ついで262全都市の都市計画担当者に対して，市街地の現状および変容状況についてのアンケート調査を行い，より広く歴史的小都市の状況の把握を試みている。第3段階としては，比較的積極的に対応しようとしている30都市について訪問聞き取り調査を行って，環境改善の具体的な動向や各種の都市計画適用の状況について把握している。

以上の調査結果を踏まえて，現行の都市計画制度では，環境改善や街並の保持と言った歴史的市街地に必要な

きめ細かな対応が困難であり，現実に即した細かな単位の制度が必要で，そのためにはより詳細な市街地調査が欠かせない，との結論を導いている。

第4章では，第2章で抽出した歴史的小都市の特性を大まかに捉え，詳細な市街地空間の変容を調査するための準備作業としてそれらの類型化を行っている。類型化の指標として，A.近代初頭から現在までの中心市街地の拡大の程度（市街地拡大／非拡大），B.周辺地域に対する都市の中心性の強弱（独立／依存），の2つを用いて，市街地拡大独立型，市街地拡大依存型，市街地非拡大独立型および市街地非拡大依存型の4つの類型に区分している。なお類型化の過程では，歴史的市街地の近世における成立基盤（城下町起源／非城下町起源）を指標としたが，分析の結果，指標の有効性が低く適用できなかったことを報告している。

第5章と第6章は本研究の中核となる章である。第5章は，地方小都市の中でこれまで地域の中心地として一定の役割を果たしてきた歴史的市街地の空間が，実際にはどのように変容してきているのかを，GISの方法を援用して記録，集計，分析を行っている。具体的には，前章で得た4類型の都市の中から典型的な6都市の歴史的市街地を選定し，わが国において都市の状況が大きく変化し始める1960年代後半から現在に至る30年間の推移を調査した。

第6章では，第5章で明らかにした歴史的市街地の空間変容の実態データを用いて，各市街地の変化の特性について詳細に分析し，その結果について考察を加えている。その結果，歴史的市街地に共通する現象として，人口の減少，空地の増加，商業系宅地の減少が並行して進行しており，こうした変化は最近になるほど顕著になってきていることを明らかにした。類型別の変容の特性としては，市街地拡大型の方が非衰退傾向が顕著なこと，独立型の方が現状では中心性を保持できているといえるが，依存型との差は縮小しつつあること，などを明らかにしている。

さらに，市街地内部の変容の姿を詳細に見ると，地区による違いが大きく，変容を一律に捉えるのは問題であることを明示した。そこで，市街地をいくつかの地区に区分して変容の差異を検討し，商業健在地区，商業停滞地区，住宅地化進行地区および潜在的住宅地区の4つの地区タイプの存在を明らかにしている。

第7章は研究のまとめの章である。まず，第6章までで明らかにした事実についてまとめ，歴史的市街地の空間変容の特性把握という本研究の第一の目的についてはほぼ成果が得られたことを述べている。ついで，第二の目的である市街地の再整備のための計画課題について，いくつかの節を設けて論じている。著者は，歴史的市街地の保全，再生にとって最も重要な条件は市街地に人が住み続けることであり，そのための最優先の計画課題は，広がりすぎた商業地を適切な規模に縮小する「商業地縮小」と，以前は商業地であった地区において居住を促進するために，良好な住宅地に向けて新たな整備を行う「住宅地転換」という方向を確認することであると論じている。さらに，商業維持地区と住宅地転換地区それぞれについての整備方法の事例，提案を行ってまとめとしている。

補論は，著者が本研究を始めた初期に，建設省の補助事業として行われたHOPE計画策定自治体を対象に実施した研究の成果をまとめたものである。対象が特殊で本論の中には位置付けられないため補論としているが，本研究の構造のアウトラインを素描した内容であり，重要な役割を果たしていることが理解できる。

## 審査の結果の要旨

この論文は，全国に多数分布しているにも関わらず，これまで殆ど注目されてこなかった地方小都市を取り上げ，その中心地区を形成している歴史的市街地の現状とその特性を明らかにし，そうした地区の活用，再生のための計画課題の抽出を試みた意欲的な研究の成果であるといえる。

著者の研究は，以下に述べるいくつかの特色をもっている。

その第一は，地方小都市および歴史的小都市を全国的な視野で捉えて定義し，さらに歴史的小都市を時間的枠

組みの中で類型化することによって，きわめて広い汎用性を獲得している点である。これまで，こうした市街地の中で先進的な試みを行っているいくつかの都市についてのケーススタディ的な研究は散見されるが，このような大きなパースペクティヴをも研究は存在しなかった。

第二の特色は，現場をきわめてよく見ていて，そこで得た実感を基盤にして有効な仮説を構築していることである。こうした大きなスケールの研究は，とかく統計資料や包括的な調査によって得られたデータの分析に偏る傾向があるが，本研究で行った調査はマクロからミクロまで仮説のレベルに対応して多重的であり，分析，考察に用いているデータは多層的である。

第三に挙げられるのは，常に計画論を意識して研究を遂行している点である。それは，研究の枠組みの構築の場面や，現地調査の際に環境改善の動向や計画制度の適用に大きな関心を払っていることによく現れている。そうした著者の姿勢が，研究成果を市街地の空間変容という複雑な現象の解明に留めずに，再整備の方向を示唆する結果となって現われたといえる。

第四は市街地という空間の問題を時間的枠組みのなかで解明しようとした視点の独自性である。各市街地の建物用途構成の30年間の変化を捉えることから，そこで生じている現象の背後にある構造を理解し，それに対する対応策を考察する可能性を導いているのである。またその方法として，GIS（地理情報システム）を援用するなど，適切な選択をしている点も評価できる。

以上は，本論文の水準の高さを示すもので，歴史的市街地と都市郊外部の変化との関係の考察や，大都市圏内部の歴史的市街地についての検討など，いくつかの課題を残しているとはいえ，都市計画分野の研究に新しい領域を開拓したものとして高く評価できる。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。